

幼児の生活をつくる

—幼児期の「しつけ」と保育者の役割—

松田純子

生活文化学科

Shaping Young Children's Daily Life :
“Shi-tsu-ke” (shaping good habits of living and manners) and the Teacher's Role

Junko MATSUDA

Department of Human Sciences & Arts

Shaping good habits and manners is one of the most important goals, as well as developmental tasks, in early childhood. Although it has been said that discipline in the home is vital to children's education, Japanese parents, in recent years, are busy with their daily work, and their children's upbringing is left almost entirely to early childhood caregivers and teachers. Consequently, caregivers and teachers have come to take weighty responsibility and to have an important influence upon the children's living. Young children's daily living is most effectively shaped by their “significant others”. **Therefore, teacher-child relationship quality should be given special consideration.**

Key words : early childhood (幼児期), **early childhood care and education (保育),**
shi-tsu-ke (shaping good habits and manners) (しつけ),
basic habits of living (基本的生活習慣)

はじめに

近年、日本の家庭の教育力や子育て機能が低下してきたことが指摘されている。かつて地域社会における共同体機能に組み込まれ育てられてきた子育てであるが、現代社会においては、都市化や少子化・核家族化が進み、身近に相談する相手もなく一人で子育てに悩む親（母親）も多いという。そうした子育て中の母親たちを、現代の地域において新たな形で支援していこうと、保育園や幼稚園に対しても子育て支援の役割が期待されており、実際に様々な取り組みがなされている。

家庭から子どもたちを預かって保育を行う保育園や幼稚園といった保育の現場では、小学校以上の学校教育の場と違って、体系的に知識や技能を子どもに教えるということよりも、まず子どもの「生活をつくる」(生活リズムを整え、基本的な生活習慣やスキルを身につけることで、健全な生活を営むことができるようにす

る)ことを大切な課題の一つとしている。いわゆる「しつけ」に重なる営みと言えるだろう。人が生きていく上で、最も基本となるものが日々の生活だが、乳幼児期は、その基盤を形づくるという重要な時期として位置づけられる。

従来は、まず家庭において子どもの生活がつくられるものであったが、今では生後数ヶ月の時期から保育園に通う子どもがおり、幼児期から幼稚園に入園する子どもについても、家庭であまり生活習慣が身につけていない子どもたちが増えてきたように思われる。保育園や幼稚園の保育者の子どもの「生活をつくる」という役割はますます重要なものとなってきている。

本論文では、幼児期を中心とした子どもの育ちを、日常生活の視点から考える。保育の専門家である保育園や幼稚園の保育者たちは、子どもたちと生活を共にしながら、子どもたちの生活を形づくっていく。その際、保育者たちは子どもの育ちをどのように捉え、ど

のようなことに配慮しながら保育を行っているのだろうか。親に代わり、今や保育園や幼稚園の保育者たちが「しつけ」の主たる担い手という観がある。もしそうであれば、これまで保育者が行ってきた保育にも変化が生じるのであろうか。保育における「しつけ」の意味も考えてみたい。

なお、本文では、保育園や幼稚園で乳幼児の保育を行う者を、親と区別して「保育者」と呼ぶことにする。また、ここで言う「幼児期」とは、おおむね2歳から就学前の6歳ごろまでを指している。

1. 幼児期の「しつけ」

「しつけ」とは、一般的には、社会生活を営む上で必要な行動を身につけられるよう、身近な大人が子どもに対して行う行為を言う。厳密に言えば、「社会生活を営む上で必要な行動」には、基本的生活習慣から礼儀作法、善悪の区別まで幅広い内容が含まれている。「しつけ」というと幼い子どもに対して行うというイメージがあるが、実際に「しつけ」をすることの多くは、子どもが思春期に至るまで（あるいはそれ以降まで）かかることで、「しつけ」の内容は拡大していくことになる。

『広辞苑』によれば、「しつけ」（仕付け）ということばは、①作りつけること。②（「躰」とも書く）礼儀作法を身につけさせること。また身についた礼儀作法。③嫁入り。奉公。④（「躰」とも書く）縫い目を正しく整えるために仮にぎつと縫いつけておくこと。⑤（稲の苗を縦横に正しく、曲がらないように植え付けることから）田植。」というようにさまざまな意味で用いられる。「躰」という漢字はよく引かれるが、「しつけ」とは、元来は着物を仕立てる際の仕付けや田の植付けの意から、子どもに礼儀作法を教え込むことを行うようになり、「躰」と表記されるようになったようである。

岡本夏木（2005）は、幼児期の「しつけ」を論じる上で、「しつけ」を次のように定義している。

その文化社会で生きてゆくために必要な習慣・スキルや、なすべきことと、なすべきでないことを、まだ十分自分で実行したり判断できない年齢の子どもに、はじめは外から賞罰を用いたり、一緒に手本を示してやったりしながら教えることでゆくこと。そしてやがては自分で判断し、

自分の「行動」を自分でコントロールすることによって、それを自分の社会的「行為」として実践できるように、周囲の身近なおとなたちがしむけてゆく営み。（p.25）

岡本は、このような定義をした上で、着物の「しつけ」が担っている意味の方が、しつけの過程の本質をよりよく表わしていると指摘する。つまり、いよいよ着物が縫い上がるとしつけ糸ははずされる。しつけは「しつけ糸」をはずすことを最初からの目的としてなされるのである。この「はずす」ことが、子どもの発達にとっても重要な意味を持つ。子どもの「しつけ」においては、大人は子どものさまざまな生活場面に介在して手をかけた末に、やがて次第に身を引いていく。子どもは、さまざまな生活場面での「しつけ」を内面化し自立して生きることを目的に、大人の側は「身を引く」ことを目的として「しつけ」は行われていくのである。

このように「しつけ」を考えてみると、「しつけ」の本質は、「保育」の本質にも当てはまる。「しつけ」にしても「保育」にしても、時間と手間のかかる営みである。「しつけ」や「保育」に、合理化や時間短縮などの考え方はそぐわない。常に費用対効果が問題となる能率主義の現代社会において、時間がかかり人手が要る「しつけ」や「保育」は、いつまでも洗練されない、時代遅れの営みと映りがちである。しかし、人が生きていく時に、目標に向かってコツコツと努力をしたり、意見の異なる人と粘り強く話し合い、折り合いをつけていくことも価値あることである。まさに「努力」できる人や「協同」できる人を育てるための営みが「しつけ」であり、「保育」でもある。人が育つには、人を育てるには、時間や手間が必要であり、それはこれからも変わらないだろう。但し、その営みの質については、常に問われなければならない。

特に幼い時期の「しつけ」（そして「保育」）において重要と思われることは、「しつけ」を行う大人と受ける子どもとの人間関係である。「しつけ」は、形から入ることも多いが、どうしてそのようなことをするのか、まだ子どもには理解できないことも多い。もちろん、保育の場では、できるだけ子どもにも理解できるように説明のことばかけを心がける。しかし、やはり子どもにとっては、大人の世界のルールや屈辱は腑におちないことかもしれない。それでも、「しつけ」

が有効性を持つのは、子どもと大人との間に基本的な信頼関係が存在しているからである。「基本的信頼関係」は、「愛着関係」ということばで置き換えてもよいだろう。

はじめは賞罰などの外発的動機づけも用いられる。大人が子どもと一緒にやって手本を見せることもある。そのような手段も、それを行う大人が、子どもにとって大好きな人であり大切な人（significant other 重要な他者）であることに大きな意味がある。情緒的なつながりを持ち、信頼するその人はまた、子どもが最も真似をしたいと思う相手であり、ほめられたいと思う相手だからである。そして、大好きなその人が「やりなさい」（「やってはダメ」と言う。大好きなその人が、自分にそうしてほしいと思っている（そうしないでほしいと思っている）という意図を感じ取るので、子どもはたとえしぶしぶであってもそれに従うのである。この時に重要な条件として、大人の意図を感じ取れる力が子どもの中に育っていること、そして、自分がそのとおりにすると大好きなその人が喜んでくれる、ほめてくれる（そのとおりにしないと怒られる）というような因果関係も理解できるようになっている必要がある。

また、幼い子どもの「しつけ」においては、大人の方も、子どもを愛着の対象として捉えていることが重要である。大人は、愛おしい大切な子どもがより良く生きていかれるようにと、機会を捉えて忍耐強くくりかえし伝えていこうとする。このような相互性の中で、「しつけ」は子どもにとって、単なる「行動」から「行為」へと意味づけられ、子どもの中に内面化されていくと考えられる。

2. 基本的生活習慣の形成と保育者の援助

2. 1. 生活習慣と「しつけ」

第二次世界大戦後のわが国の急激な社会変化に伴い、人々の生活様式は多様化し、生活時間の在り方も大きく変化した。昼夜を問わず多忙な日常生活を送る大人は、たとえ幼い子どもを持つ親であっても、自らの生活習慣を子ども本位に改めることは容易ではない。しかしながら、子どもにとって、生活習慣の問題は発育・発達にかかわる重要な問題であり、生活習慣の乱れが指摘される現在の状況は大きな社会問題として捉えられるべきである。そのことが、家庭の教育力

や子育て機能低下の主な要因とも考えられるからである。そして、幼児期の基本的生活習慣の形成は、「しつけ」と切っても切れぬ関係がある。子どもに基本的生活習慣を身につけさせることは、幼児期の「しつけ」の大きな目標の一つである。

2. 2. 基本的生活習慣

人間にとって「生活習慣」とは何であろうか。それは、人間が生きていく上で必要な行為の中で、日常的に繰り返される活動のことを言う。その中でも特に基本的なものを「基本的生活習慣」と呼んでいる。保育現場では、基本的生活習慣は「食事」「排泄」「睡眠」「衣類の着脱」「清潔」という五つの領域に分けて捉えられている。「食事」と「排泄」と「睡眠」は、人間の生理的欲求を満たすための生活習慣であり、「衣類の着脱」と「清潔」は、人が快適に生活するために必要な生活習慣と言える。その他にも、「あいさつ」や「かたづけ」など、幼児期に身につけさせたい生活習慣はいろいろあるが、まずはこの五つが基本とされる。

『保育所保育指針』（厚生労働省、2008）を見てみると、基本的生活習慣の自立の目安として、おおむね3歳において、食事・排泄・衣類の着脱など、ある程度自立できるようになる。食事については、自分で箸を使って食べようとしたり、排泄や衣類の着脱についても、自分からしようとする。つまり、3歳の終わりごろまでに、大人の助けを借りながらだが、子どもは、ある程度身の回りのことが自分でできるようになっていく。そして、おおむね5歳においては、起床から就寝にいたるまで、生活に必要な行動のほとんどを一人でできるようになる。小学校入学前までには、基本的生活習慣がより洗練されて、大人の指示を受けなくても自分の判断でいろいろなことができるようになっていくのである。

基本的生活習慣の形成は、乳幼児期の子どもにとって大変重要な発達課題である。基本的な生活習慣が形成されるということは、身の回りのことが「自分でできるようになる」ということであり、これは、生まれたときに大人の手を借りなければ何もできなかった子どもにとっては、たいへんな進歩である。

このような基本的生活習慣の形成は、毎日の生活のくりかえしの中で達成されていく。必要な場面で、大人が教え込むことももちろんあるが、幼児がまず周り

の人が何をどうしているのだろうと見る「観察」、自分も真似をしてやってみようという「模倣」、そして例えば「ごはんを食べる前に手を洗おう」「いただきますをしよう」「トイレに行こう」などという大人のことばかけや、それを自分でも言うことによる「意識化」（「ことばによる意識化」）によって、少しずつ子どもの中に定着していく。さらに、その行動に対する大人の承認・評価（肯定的評価）が加わることで、幼児はいっそう励まされ、自分の「行動」に自信と裏付けを得て、やがて自らの「行動」をコントロールして、それを社会的「行為」として実践できるようになっていく。

基本的な生活習慣が形成される前提には、当然それに関わる幼児の身体器官やその機能の発達がある。また同時に、幼児の興味・関心がそれらの行動に向くということも重要な要件である。一方で、「自分でできるのだ」という感覚は、自己有能感をもたらす。それは自信となって、他のことにも挑戦してみようという意欲につながっていく。自立への欲求から何でも「自分でやりたい」という気持ちが幼児の中に育つことは、大人にとってはうれしい半面、困ることもあるが、幼児の発達の上では、極めて健全なことであり、保育のなかで大切にしなければならないことの一つである。

2. 3. 生活リズム—スクリプトの形成と生活の見通し—

生活リズムは、生理的バイオリズムと関連が深く、それぞれの子どもが生来持っているリズムに、周囲の大人の生活リズムが次第に取り入れられて形成されていく。具体的には、睡眠や食事の時間を中心に形成されていくことになる（藤崎他，1998）。したがって、子どもの生活リズムは大人の生活リズムから大きな影響を受ける。そのため、特に子どもが幼いうちは、子どもの生活リズムは大人とは別に優先して考える必要があるだろう。

最近では大人に合わせて、夜おそくまで起きている幼児が多くなっている。いわゆる子どもの生活の夜型化だが、厚生労働大臣官房統計情報部の「第4～6回21世紀出生児縦断調査」（2005～2007年）によれば、3歳児の約4割は午後10時以降（時間が不規則の場合も含む）に就寝している。この現象については、幼児の睡眠時間の不足とともに、生体時計の調整をくわせるという神経生理学的な見地からの懸念も表明さ

れている（安藤，2010；神山，2007）。

一方で保育現場では、遊べない子どもが増えてきたという声も聞かれる。遊びは子どもにとっての仕事と言われるくらい大事な活動であり、子どもが遊べないということは、さまざまな問題につながっていく可能性がある。その原因はいろいろ考えられるが、まずは子どもの生活がしっかり営まれているかどうかということが確認されなければならない。決まった時間にしっかり食べて、しっかり眠れているか。午前中に集中力がなく、何となく元気がない子どもを見かけることがある。また、何となくイライラして周りの子どもに当たるような子どもの姿を見ることもある。そのような子どもは、思う存分遊ぶことができない。それぞれの子どもにそれぞれの理由があるはずだが、前の晩に夜更かしをしていて睡眠が十分ではなかったり、朝から食事を取らずに登園してきているということが、集中力がなく、元気がない、荒れた状態として表れることが多い。夜早く寝て、朝は気持ちよく目覚め、朝食をしっかりと取ることで、子どもの園生活も充実する。そして、生活リズムの形成が、遊びや学びが充実する原動力となるのである。

幼児は基本的な生活習慣を身につけながら、一日の生活の流れというものも理解していくことになる。基本的な生活習慣を理解し、実践できるようになることで、一日の時間的な目安、生活の区切りが分かるようになって、見通しを持ちながら生活することが可能になってくる。たとえば、3歳児ではすでに「ごはんを食べる」「おやつを食べる」「寝る」「起きる」などの生理的活動を中心とした一日の生活の流れを理解しているという（藤崎，1995）。このような一まとまりの行動の流れの理解は、「スクリプトの形成」と呼ばれるが、それが可能になると、幼児は主体的に行動ができるようになり、主体的に生活することもできるようになってくる。自分の力の及ばない大人の都合で動かされる生活ではなく、次にはこのようなことが待っているから、こうしようという見通しを持って生活することは、子どもにとって、自分の生活を自分でコントロールしているという感覚を生む。毎日くりかえされる活動があって、生活リズムが安定していると、子どもの身体はもちろん、心も活力を得て、情緒面の安定にもつながる。身の回りのことが自分でできるようになることで、自信を持ち、安定感を持って、それ以外のこ

とにエネルギーを向けることもできるようになる。自分のやりたい遊びを見つけ、夢中になって遊ぶという姿が見られるようになる。子どもの遊びが活発になるということは、先に述べたように子どもの学びが活発になるということでもある。

子どもが自分の好きなことを見つけて自由に遊べるようになってくると、それを中断することは子どもにとって面倒なことである。しかし、トイレに行きたいと感じたら、自分でトイレに行って排泄をする。手がよごれたら、自分で手を洗い、きちんとタオルやハンカチで手を拭く。暑くなってきたら、自分で上着を脱いで、調節をする。このようなことができるようになることで、またそのことを自覚できることで、子どもは、自分がやるべきことをやって戻ってきたらまた続きができるという見通しが持てる。こうして、子どもの生活は自由度を増していくことになる。そして、さらに子どもは他のさまざまなことに目をむけ、自分自身の力を発揮するようになっていく。

2. 4. 保育者の援助

基本的な生活習慣や生活リズムの形成において、保育者の援助は欠かせない。特に、当たり前と思われる基本的な生活習慣や生活リズムの乱れが大きな問題となっている今、保育者のきめ細やかな援助が必要となっている。それは同時に、保育者自身の生活習慣に対する意識化と見直しを伴うことでもある。

幼児期前半は、基本的な生活習慣についても、実際にはまだうまくできないことが多いので、自分でできる部分をうまくお膳立てして、できるようになってきたら、自分でやる部分を増やす、難しい部分・チャレンジする部分を追加するというような工夫も必要である。大人がやってしまえば簡単で問題ないことでも、子どものやる気をくじかないよう配慮しながら少々面倒でも子どもと一緒にやるというようなこともある。例えば、服のぼたんかけは、幼児にとっては、首もとの方が見えない。触れてはいるが見えていないものをイメージしながら作業することは幼児には難しい。しかし、下の方だと自分で見ることができ、やりやすくなる。上の方は、大人がやることにして、下の方を子どもにやらせて終わるようにすれば、子どもは自分でやり遂げたような気持ちがするだろう。一気にやろうとすると大変だが、スモール・ステップに分ける

ことで、子どもにも目標が見えて、自分でやるべきこともより明らかになり、意欲もわく。現実の日常生活の中では、十分に時間を割けない時もあるが、できるだけ子どもが「自分でできた」という経験を大人が演出できるようにしたい。そして、「できた!」という瞬間を捉え、「やったね!」「できたね!」と声をかけ、子どもの達成感や喜びを共感する。そのような経験を多く積み重ねることができると子どもの意欲と自信は増していくことだろう。

もう一つ例を挙げよう。そろそろ午睡の時間という時に、「さあ寝なさい。」と子どもに言うだけでは、すぐに寝る気持ちにはなれない。集団で生活を送る保育園での睡眠は、家庭以上に難しいと言える。そのような条件の中で、幼児の午睡を確保するためには、周到な雰囲気づくりをして子どもの気持ちを切り替えやすくするという必要もある。「もう少ししたら〇時だから、寝る時間」と予告することも子どもが心の準備をする手助けとなる。部屋の扉を閉めて外の雑音が入らないようにして静かな環境を整えたり、電気を消してうす暗くする。寝る準備を済ませたら絵本を読むことを習慣にすることなども、子どもが見通しを持つためのよい助けとなるだろう。松谷みよ子の『もうねんね』(1968)という絵本は、動物たちも、主人公の女の子もみんな眠くなって「おやすみなさい」というシンプルな内容の絵本であるが、寝るのは自分だけではなく、みんなが眠くなって「おやすみなさい」、そして「ねんね」とくりかえして眠りにつく雰囲気をつくっていく。このように場面に合った絵本の助けを借りることも有効である。

保育者として、子どもの生活習慣の「質」についての吟味も忘れてはならない。子どもに早い時期から何でも自分でやらせて、早く自立させたいという心情が生れるのは、親心としては当然かもしれない。しかし、幼児の段階では、例えばぼたんかけでも、ぼたんのかけ違いがあったり、うまくできていたのに、気持ちや体調、環境の変化などでできなくなることもよくあることである。やろうとする意欲を認めるとともに、結果については大人がよく確認することも重要な「しつけ」の一部であると考えられる。生活習慣の意味を大人もよく理解して、何のためにやるのか、どのようにできたらよいのかということ子どもに伝えていく。できていないところは援助をして、期待される行

動や出来上がりの状態を確認するという対応が日常的に必要となる。「ごはんをこぼさないで、上手に食べられると良いね。今度はお茶碗を持って食べてみようか。」「靴下はかかとにぴったり合うように。そして、上まで引き上げてかっこよくしよう。」そのような具体的なことばかけと実際の援助の積み重ねが、子どもの生活習慣の自立を確かなものにしていくことになる。保育者としては、「動機づけ」（上手に、かっこよく）と「具体性」（お茶碗を持って、かかとにぴったり）と「目標」（ごはんをこぼさない、上まで引き上げる）をもって、あせらず忍耐強く子どもにつき合うことが大きな役割となる。

また、子どもが手伝ってほしい時、「手伝って」と言えることも大切であろう。子どもは、生活習慣をいつの間にか自分で身につけるのではなく、大人のあたたかい配慮の中、多くの失敗を重ねて少しずつ身につけていく。失敗をしてもさりげなく受けとめてもらえるし、必要な時はいつでも助けてもらえるという安心感が、子どもの積極性を引き出すことになる。したがって、保育者と子どもの信頼関係がしっかりと育まれていることが欠かせない条件となる。

3. 人間関係の形成と保育者の援助

3. 1. 保育者と子どもの信頼関係

子どもの健やかな成長・発達のためには、信頼できる大人の存在が欠かせない。保育者は、何よりもまず子どもとの間に信頼関係を築くことに心を砕く。それが効果的な保育を行うための基本であることを知っているからである。子どもと保育者との間にしっかりとした信頼関係ができることで、子どもは家庭から離れて初めて経験する集団の中で、保育者の存在を支えにして自分を発揮できるようになっていく。そして、先に述べた生活習慣の形成についても、保育者との信頼関係が基礎となって始めて保育園や幼稚園での生活習慣の形成が達成されていくのである。もちろん、この前段階に家庭において親との愛着関係が築かれていることが前提である。

親子のつながりは、子どもが誕生した時から、あるいは誕生以前の胎児の段階から、毎日の生活を共にする中で培われる関係でもある。それが今、働く母親も増え、乳児期から保育園などに預けられ、親以外の大人と過ごす時間の方が長い子どもも多にいる。また、

母親と一緒に過ごす子どもにしても、地域での近所づきあいも希薄になってきた都市部では、親と子だけの核家族で、昼間は母親と子どもが、密着した親子関係の中だけで過ごすことになり、健全な親子関係が育まれているのか親も自覚しにくい状況が生まれている。

保育者は、もちろん保育現場で会う子どもたちとは始めは他人であるが、出会いから始まって、親に匹敵するほどの信頼関係を、短期間に子どもとの間に結んでいく。幼い子どもたちにとって、家庭外で身も心も委ねることができる最初の存在が保育者である。そのような保育者と子どもの関係、また保育者の子どもとの関わり方を、「しつけ」の場面を考えながら見てみることにしよう。

3. 2. 保育者の関わり方

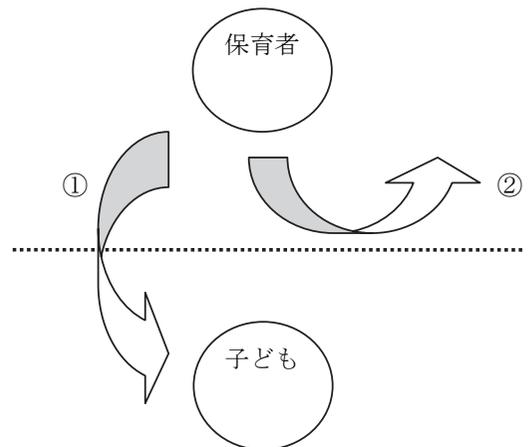


図1

図1は、保育者の子どもとの関わり方のモデルを示したものである。保育者と子どもの間には、大人と子どもの境界線が引かれている。この境界線はあまり固定したものではなくて、柔軟なものとする。「しつけ」の場面で、保育者の子どもに対する関わり方を見ていると、大きく2つの関わり方のモデルがあるように思われる。一つは、①の関わり方である。矢印は境界線を越えている。保育者は境界を越えて子どもに近づこうとする。子どもの目線で物事を捉え、子どもがどのように感じているのかを子どもの立場に立って考えようとする。子どもと一緒に同じことをやってみたり、子どもの側に寄り添い見守ることもある。しかし、

場合によっては、②の関わり方をしなければならない時もある。大人として「今は一緒に遊べない」「あなたが今それをするを許すことはできない」「今は先生の言うことを聞かなければならない」「これは大人がやることだから、子どものあなたはしなくていい」というように、毅然とした態度で指示をしたり、子どもに対して模範となる行為を見せるという関わり方である。

保育者が①の関わり方をする時、子どもの方は自分の気持ちを受けとめ、共感してくれる存在として、保育者に親近感を感じることだろう。したがって、それは子どもを理解するための有効な方法でもある。「共感的理解」の関わりモデルと言ってもよいだろう。子どもの気持ちに共感することは、保育者の基本の態度であり、保育者としてはまず①の関わり方を用いて子どもとの信頼関係を築こうとする。②の関わり方は、子どもとの信頼関係ができていて、より有効な関わりとなる。今日、特に親子の関係においては、この大人と子どもの境界線が、そして大人の子どもに対する関わり方がどうあるべきなのかが、あいまいになっており、混乱しているようにも思える。

①の子どもの心に共感する関わり方では、批判や評価を抜きにして、子どもの行動をよく見ること、子どものことばをよく聞くことが重要になってくる。子どもはまだ自分の気持ちをことばで十分に表現できないことが多いので、それがいろいろな行動となって現れることもある。問題と思われる行動も、叱ってその行動を正す前に、どうしてそのような行動をしなければならなかったのか、その時その子どもはどのような気持ちであったのかを保育者は理解しようとする。もちろん、危険なことは直ちに止めさせなければならないが、いろいろなトラブルも、子どもと保育者双方にとって有意義な学びの機会として、保育者はていねいに関わっていく。

3. 3. 友だち関係

子どもの立場に立ち、子どもの目線で見ようと心がけると、それまで気づかなかった子どもの内面世界が見えてくることがある。幼児期の子どもは、信頼できる大人との関係を基盤として、友だちとの関係を結びはじめ、その世界を広げていく。ここで2人の幼児の描画表現とそれにまつわるエピソードから、言語化さ

れない子どもの内面世界を探ってみたい。

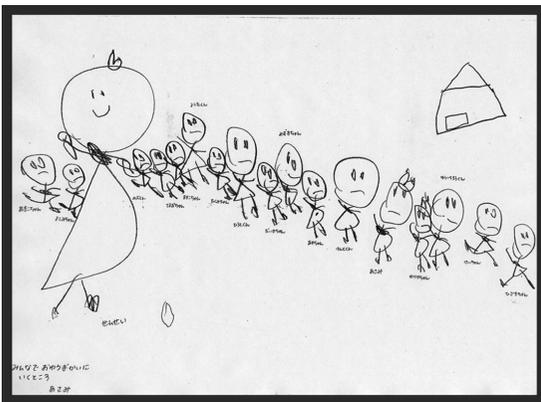
描画1：友だちに認められた自分



描画1は、4歳の女の子Mが描いた絵である。Mは、とても優しくおとなしい子どもで、日頃はクラスの他の子どもたちの陰にかくれて目立たず、自分から強く自己主張するようなこともあまりなかった。Mの髪はとても長く、Mが遊ぶ時に邪魔にならないように、いつも母親がMの髪をバレリーナのようにきれいに結ってくれていた。ところがある時、Mが長い髪を下ろし二つに束ね、おさげにして登園してきた。他の子どもたちは、いつもと違うMの様子に驚き、この時ばかりはいつもおとなしいMがクラスの主役のようであった。「今日のMちゃんの髪、いつもと違うね。何だかお姉さんみたい。」という保育者のことばに皆がうなずいた。その日にMが描いたのがこの絵である。女の子の身体よりも大きいくらいのおさげが二つ力強く描かれている。いつものMの絵に比べて特別勢いのある絵であった。「この女の子は、今日のMちゃんでしょ！何だかとてもうれしそうね。」と保育者が言うと、Mはちょっとはずかしそうにうなずいて、「先生にあげる。」と言って、この絵を保育者に手渡した。保育者は、Mが勢いのある伸びやかな絵を描いたことがとてもうれしく、この絵をMの母親にも見てもらいたい、今日のことをうちの人に話してほしいと思った。そこで、「ありがとう、Mちゃん。でもMちゃんのお母さんにも見せてお話ししたら？」とMに言った。しかしMは、「いいの。先生にあげる。」と言うので、保育者もそれならばとこの絵を受け取ったのである。

この絵を見ると、その時のMの上気したうれしそうな表情が浮かんでくる。事情を知らない人が見たら、おかしい絵だとも思えるかも知れないが、力強く大きく描かれた二つおさげには、それまで他者の中に埋没しがちだったMの“自分”（友だちから認められた“自分”）に対する自信と喜びが表現されているように思われる。そして、その日のうれしさや興奮は、母親よりもその場にいた保育者とまず共有したかったのだろう。子どもと経験を共有し共感することで、いきいきとした子どもの内面世界が見えてくるようだ。また、子どもは、共感してもらった大人に対してさらに親近感を持つと同時に、外の世界に踏み出す勇気も得るのであろう。その後、Mが髪を下ろしてくることはなかった。Mはおさげ髪に頼ることなく、少しずつだが、自ら友だちとの関わりを持つようになっていった。

描画2：友だちと共に在る自分



描画2は、4歳の女の子Aの絵である。「みんなでおゆうぎ会に行くところ」だという。Aが通う幼稚園では、おゆうぎ会は園舎から少し離れた場所にある大きなホールで行われる。おゆうぎ会の当日は、みんなでホールまで歩いて行った。行事の日は、いつもとは違うハレの日である。いつもよりおしゃれをして、いつもとは違う雰囲気の中で、興奮や緊張感もある。いつもは歩かない道をみんなで一緒に、これから起こることを想像したり話したりしながら歩いて行ったのだろう。大人にしてみれば、メインイベントはもちろんホールの舞台の上での出し物なのだが、子どもにとってのおゆうぎ会の印象はそうとは限らない、いろいろなだと教えられる。保育者は、子どもが経験した行

事の絵を後で描かせることがある。おゆうぎ会の絵であれば、当然舞台上で自分たちが演じているところを子どもが描くことを期待するだろう。しかし、Aにとっては、みんなで一緒にちょっとドキドキしながらホールまで並んで歩いて行ったことが楽しく、一番印象に残ったことだったのだろう。

この絵は、Aが家で描いたもので、後で母親から担任保育者にプレゼントされたものである。担任保育者とA自身の他にも、クラスのメンバーがもれなく描き込まれている。母親の励ましもあったかもしれないが、4歳の子どもにとって17名のすべてのクラスメンバーを描いていくのは、大変根気のいる作業である。それだけに、共に園生活を送るクラスの友だち皆が、Aの中にしっかりと位置づいていることが感じられる。ことばを換えれば、友だちと共にある自分が自覚されていることでもあろう。この幼稚園では、3学期に一年間の保育の締めくくりの意味も持たせながら、おゆうぎ会が催される。子どもたちの成長の姿を保護者にも子どもたち自身にも実感してもらう目的がある。その時期に描かれたこの絵の背景には、1年間のクラスの友だちとの生活経験の積み重ねがあるのである。

この二つの描画表現から、幼児期の子どもが友だちとの関係を通して、自分を見出していききっかけや過程が見てとれるように思われる。幼児は、人間関係を通して自分づくりをしているとも言えそうである。

3. 4. 保育者の援助

保育園や幼稚園では、保育者は幼児の親に代わって、幼児と信頼関係を結び、心の拠り所となって、その育ちを支えていくことになる。幼児との信頼関係を通して、保育者が「しつけ」や「保育」を行うことは、先に述べた通りである。さらに保育の中で、保育者は、幼児が保育者との関係を基盤として、今度は友だちとの関係を築いていけるようにと、幼児の発達に即したさまざまな活動を考えたり、遊びの中の機会を捉えて働きかけたりする。図2・図3は、そのような過程を表したものである。

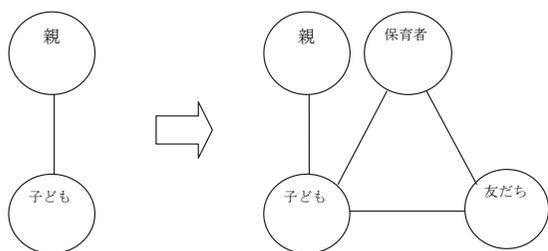


図 2

図 2 では、保育者が親と並ぶ存在となつて、幼児との信頼関係を築き、さらに幼児の友だちづくりの援助も行っていく。

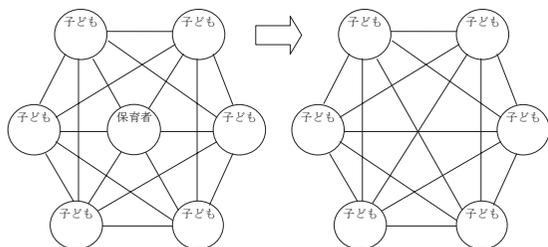


図 3

図 3 においては、保育者は幼児と自分との関係づくりから、幼児同士の関係づくりを励まし、やがて保育者自身が中心にいらなくても子どもたちだけで活動できるようにしむけていく。このような保育者のやり方は、「しつけ糸をはずす」ということと重なる援助である。

4. 「しつけ」と「保育」—保育者の役割—

子どもの気持ちに共感しながら、子どもと一緒にあって支える保育者の援助と、大人として子どもに模範を見せる保育者の援助について、前者は、保育者は子どもにとっては安心して甘えられる存在だが、後者は、子どもにとっては時に厳しい、でも「なりたい」というあこがれの存在でもあり得る。どちらも有効な関わりであるが、具体的な場面で、どちらの関わり方をするのか、実際に難しい問題である。その場面で、子どもはどのような体験をするのか、自分は何を大切にするのか、何を子どもに伝えたいのか、保育者の考えや判断が問われることになる。遊びを中心とした生活を大事にする保育現場では、保育者が介入しなければなら

ないような出来事が日々起きていて、保育者はその都度、子どもの様子を見て、子どもの話を聞き、さまざまなことを考慮ながら、判断し、行動している。何が正解かは一概には言えないが、できるだけ確かな判断ができるように、親や他の保育者とも話し、情報を集め、記録をつけ、省察を行いながら、より良い保育を探求し続ける。子ども、親、同僚との共同作業である。

保育者はまた、子ども同士を「つなぐ」という役割も担っている。他者との関係を模索する子どもたちが、友だちを友だちと認め、お互いが一緒にいることがうれしい存在となるまでには、多くのぶつかり合いも経験する。人とつながるためのマナーを身をもって学んでいく子どもたちである。保育者の忍耐強いいねいな日々の援助（しつけ）が必要である。

子どもの育ちにとって、安心できる生活の場があること、その生活の場に大人や友だちとの信頼関係があることは、大変重要なことである。安定した生活とあたたかい人間関係を基盤に、子どもは安心して自分の世界を広げ、力を発揮することができる。親子をはじめ、親しい者同士の関係では、ことばにしなくても分かり合えると私たちは考えがちである。以心伝心は日本文化の美德と考えられているが、人と人との関係を学び始める子どもたちの保育においては、ことばでしっかり確認をしながら、保育者が関係を築いていくということも必要である。特に大量の情報と多様な価値観が存在する現在では、保育の現場においても、ことばにして明確に伝えるということをもっと意識化すべきかもしれない。ことばは子どもとの信頼関係を築くための最も身近な手段でもある。日々の生活の中で、少しでも子どもとしっかり向き合って話をする時間をもちたい。

ところで、文化や価値観の多様化する現代社会において、これから生きていく社会で必要となる習慣やスキル、なすべきこと・なすべきでないことについて、社会の構成メンバーにどれほどの共通理解が保持されているだろうか。幼い時期に、親以外の保育者に主として「しつけ」を受ける子どもにとって、その保育者の価値観やしつけのやり方は強い影響力を持つ。人間形成の基礎となる「しつけ」は、かつて地域社会の共同体機能の中で発達段階ごとに多様な人々によって行われていた（松本, 2010 a; 松本, 2010 b）。それが、

その後家庭に囲い込まれ、今また集団保育の場や学校に「委託」されつつある。家庭で行われていた幼児期の「しつけ」が、保育者に委ねられるとしたら、幼児期の育ちにかかる保育者の責任はさらに重く、保育現場の在り方そのものも見直していかなければならない。

保護者に対する保育現場の説明責任が重要視されるのも、このような事情が背景としてあると思われる。多様な考え方や価値観を持つ保護者に対して、保育現場の対応も非常に難しくなっている。保育園や幼稚園は、もちろん子どもの育ちを保障するための場であるが、家庭においても少なくとも幼児期から小学校低学年までは「子どものために」「子ども中心に」という意識を大人が持つことが、現代の子どもへの健全な成長・発達にとって重要ではないだろうか。新小田ら(2008)の研究によると、子どもの就寝時刻を決める要因として第一に「母親の平日の起床時刻」が挙げられている。母親の起床時刻が遅いと、子どもの朝食・昼食・夕食時刻に影響があり、必然的に子どもの就寝時刻が遅くなるという。これは、母親だけの問題ではなく、当然父親を含めた家族の生活時間の問題として見直しをしていく必要がある。そのような親に対する助言や指導も、これからの保育者の重要な役割と考えられている。

そのような状況にあって、保育条件についても、大幅な改善が必要である。特に、一人の保育者が見る幼児の数については、保育園においては、3歳児おおむね20人につき保育士1人以上、4歳児以上はおおむね30人につき保育士1人以上、幼稚園においては、1学級の幼児数は35人以下で1名の教諭を配置するという(最低)基準となっている。このような条件の下で、家庭で行われていたようなきめ細かな「しつけ」が保育園や幼稚園で十分にできるとは考えにくい。時代や社会の状況に対応して、保育者1人に対する適正な幼児数に改められる必要がある。少なくとも欧米では、1人の保育者につき、10人前後の幼児というのが普通である。

現代社会において、保育者はかつてないほどの重要な役割を果たすことが期待されている。幼児期の子どもに対する「しつけ」は、「保育」と重なるきわめて人間的な営みであり、機械や技術による合理化や会社組織のような分業化はできない。人が人をしつけ、育

てるのであり、全人的な関わりが必要となる。そのことの重みを十分に理解して、これからの子育て支援や保育者の支援体制づくりを進めていく必要がある。

おわりに

「しつけ」は従来、地域社会の中の家庭で行われてきたものであり、育児に携わる者は保育や教育の知識や技能を習得した・しないに関わらず日常的に「しつけ」を行ってきた。それゆえに、人間形成の基礎として「しつけ」は重要とされながらも、専門性とは無縁の営みであるかのように今日まで捉えられてきた。それはまた、「しつけ」だけではなく、「保育」に対する世間一般の見方でもあったように思われる。しかしながら、現代においてそのような旧態依然とした認識は改められなければならないだろう。子育ての困難、子育ての困難は社会的な問題であり、それらの困難に対応すべき専門家としての保育者は、知識・技能に加えて人間性という資質まで問われ、今後ますますその活躍が期待されている。

一方で、保育の現場は、緊縮財政のもとでの保育制度改革の最中にある。これまで国が定めてきた保育の最低基準までも規制緩和されつつある状況の中で、保育現場の負担がますます増えている印象がある。しかし、子どもたちと共に生活をつくっていく「保育」という営みは、苦勞を伴う分、また喜びも大きい。少なくとも保育現場の保育者たちの多くはそう感じているにちがいない。子どもと生活を共にしながら展開する保育の実践を通して、子どもに対する理解は深まっていく。保育を志した者にとっては、それは何よりも興味深く楽しい営みと感じられるであろう。

確かに子育てや保育はいつの時代も大変であったに違いないが、現代は特にその困難さが際立ってきたように思われる。一方で、その真のおもしろさ・楽しさを伝える人が少なくなってきたのも事実であろう。保育現場の保育者たちがその役割を負わなければならないが、今やいろいろな新しい役割が求められて余裕がない状態である。しかし、子どもの愛らしさ、子どもの大なる可能性、そして子どもから学ぶことの豊かさをもっと社会に対して伝えていくことが、今一番大切な役割であるかもしれない。幕末、明治の日本を訪れた外国人が記しているように、日本人は、外国人が驚くほどに子どもをかわいがる国民であった(モース、

1970)。現代の日本人はどうであろうか。

子どもに笑いかけられて、思わず微笑み返したという経験を持つ人は少なくないだろう。子どもの笑い声が聞こえるだけで明るい気持ちになるのは、多くの人々に共通する心情であろう。それがうるさく感じられたり、イライラにつながるような大人が多くいるとしたら、その社会の未来は暗いと言わざるを得ない。保育の場に身を置くと、相手を気遣い、相手の立場に立って考えるということが、実は自分に返ってくるということを経験させられる。子ども本位に考えて生活をしていると、子どもたちから多くのことを教えられ、与えられる。それは人が持つ笑顔の力であったり、驚くべき発達の姿であったり、また信頼されることの喜びであったりするが、このような多くの学びと喜びを与えてくれる子どもたちに、私たち大人はもう少し本気で向き合い、楽しい時間を共有するという努力をしなければならぬのではないか。それは何も特別なことではなく、子どもと共に生活をつくり、それを楽しむということではないだろうか。

松本亜紀 (2010) : 伝統的子育てに見るオヤコ関係, 倫理, 第 59 巻・第 10 号, 28-33.

松本亜紀 (2010) : 伝統的社会における「しつけ」のあり方, 倫理, 第 59 巻・第 11 号, 28-33.

モース, E. S. 著, 石川欣一 訳 (1970) : 日本その日その日, 平凡社.

引用・参考文献等

安藤朗子 (2010) : 子どもの生活リズムと発育・発達—睡眠に焦点をあてて—, 日本子ども家庭総合研究所 編, 日本子ども資料年鑑 2010, KTC 中央出版.

大田堯 (1990) : 教育とは何か, 岩波新書.

岡本夏木 (2005) : 幼児期—子どもは世界をどうつかむか—, 岩波新書.

神山潤 (2007) : 幼児の生活の危機をめぐって—保育の立場でどう取り組むか—, 日本保育学会第 60 回大会記念シンポジウム.

厚生労働省 (2008) : 保育所保育指針解説書, フレーベル館.

新小田春美 他 (2009) : 平成 20 年度厚生労働科学研究 夜型社会における子どもの睡眠リズムによる心身発達の前方視的研究と介入方法に関する研究.

藤崎春代 (1995) : 幼児は園生活をどのように理解しているのか, 発達心理学研究, 6, 9-11.

藤崎真知代・野田幸江・村田保太郎・中村美津 (1998) : 保育のための発達心理学, 新曜社.

松谷みよ子 著・瀬川康男 絵 (1968) : もうねんね, 童心社.